【本学生２名が、第18回ひびしん俳句大賞　一般の部 理事長賞および優秀賞を受賞しました】

福岡ひびき信用金庫（北九州市八幡東区、井倉眞理事長）が主催する「第 18 回ひびしん俳句大賞」の授賞式が 12 月 10 日に本学にて執り行われました。同賞は地域の文化振興に寄与することを目的として開催され、今年で 18 回目となります。今回は全体で 7,357 句の応募があり、そのうち「一般の部」695 句から受賞者が選出されました。

本学からは、児童・幼児教育学科１年生の新野優衣さんの作品「水たまり覗いてみれば五月晴」が理事長賞に、心理・文化学科１年生の西本亜弥さんの作品「子どもの日もうおとなねと母笑う」が優秀賞に見事、選ばれました。

表彰式では、選考委員より以下の講評が寄せられました。

・新野さんの作品について

「五月晴れは、梅雨の最中の晴間のこと。1 日、半日、あるいは数時間。とにかく、長くは続きません。雨が続いた後の晴間は、うれしいものです。外に出ると水たまりができていて、空が映っています。晴れた空が水たまりの中にあって、それも五月晴れだというのです。嬉しさが伝わります。」

・西本さんの作品について

「母親にとって子どもは何歳になっても子供に変わりわりはありません。「もうおとなね」と口では言ったものの、まだ社会人になっているわけではないし、小中高の延長で、内心は「こどもの日」を卒業するのは早いわねと思っているかもしれません。あるいは、「母笑う」を立派に大人になってくれたねという意味の満足の笑いと受け取ることもできます。

いずれにしても、子どもの成長を祝う母親の気持ちを感じ取っての作品と思われます。温かい家族を想像させます。」

このたび受賞された新野さん、西本さん、おめでとうございました。

井倉理事長（左）から理事長賞の賞状を授与される新野さん

井倉理事長（左）から優秀賞の賞状を授与される西本さん